

第4回「居場所、居場所っていうけれど！」

不登校の子どもたちの増加が止まりません。居場所の必要性を感じて、行政の方たちもフリースクールなどの「居場所」を公立学校や公的機関の中にも作り始めています。そのような居場所とはどのような役割を果たすのでしょうか。

学校に行かないと言っても様々な原因と状況があります。大きく分けて二つです。

一つは「学校に行かない」でしょう。これは行きたくないから行かないという、自分の意思に従って、意志通りに行動がとれるということです。この場合、学校のしていることに興味がない。自分の将来のアウトラインに学校の必要性を感じない。これらは自分なりの価値観で判断して、その通りに行動をしています。このような子どもたちにとって、居場所は自分で探すものです。自分の行動を起こすために役にたつところを探すでしょうね。学校の持つ価値観がこの子ども価値観と異なるということもあります。机に向かって授業を受け、試験をして成績を出し、部活内や友人間で関係性を育てるといったプログラムに乗らないお子さんたちです。

二つ目は「学校に行きたいけどいけない」お子さんです。自分の中では行こうと思っているのに、様々な理由で学校にたどり着くことができない場合です。原因と考えられるのは、エネルギーダウンです。家庭や学校でストレスをかけられて、エネルギーが切れてしまい、校門までたどり着けないのです。家の玄関を出ることもできない子もいます。自分の部屋から出ることも難しい子、自分の布団から出ることもできない子もいます。この玄関は出られるけれども校門に入れない子どもたち。この子たちがいわゆる行政がセッティングする「居場所」にゆける子どもたちです。お布団から出られないお子さんや玄関を出られないお子さんに対しては、別の対応が必用なのです。

次に多いのは発達の問題、特に ADHDなどで教室での対応が難しいお子さんでしょう。このお子さんたちには単なる「居場所」では、教室と同じことが起こります。必要な事は発達の課題を正確にとらえて、SSTなどのその課題に応じたプログラムを実施することです。これには専門家の見立てや分析と具体的な SST のプログラム構築が必要です。果たして、単なる居場所というネーミングの施設で、それが可能でしょうか。

発達に特性をもつ子どもたちはいじめの対象となりやすいです。いじめ被害となると心に傷を負います。この場合もエネルギーがダウンして、校門を通れないということになり不登校となります。このお子さんに必要な事は、単なる居場所ではなくその心の傷つき、時には PTSD やトラウマになっている子どもたちもいることでしょう。心理治療ができる居場所の設定が必要となるのです。

このように、一概に居場所と言っても様々な機能が必要ですし、居場所だけで不登校が解決できるものではありません。不登校という大きな問題のほんの一部をサポートするにすぎないということを大人たちは認識しないとイケません。教育の改革を含めもっと理解と行動を示さないといけない時期が来ているということです。

「居場所っていうけれど、子どもに関わらなければ問題は解決しません。」